

茶事處。句々祖師禪。後微妙公召小松。賜歲祿二百石。又賜居宅於月城と。月城は小松城内三ノ丸をいへり。按ずるに、寛永十九年小松土帳に、二百石三ノ丸千宗室と見ゆれば、利常卿小松城へ養老の時、小松へ召連れられ、城内三ノ丸の地に邸宅を賜はり、爰に居住せしと聞ゆ。然るに萬治元年十月利常卿小松城にて頓に薨逝し給ひけり。依つて翌二年綱紀卿の命により、小松附の諸士悉く金澤へ移住す。宗室も此の時金澤へ來りたるなるべし。寛文十一年の土帳に、百五十石茶堂茶具奉行千宗室歳五十とあり。また元祿元年の土帳に、百五十石千宗室と載せたり。同六年の土帳に、千宗室みそぐら町稻荷橋近所とあり。此は二代宗室にて、小松より移住の時賜はる居邸に相續して居たりしと聞ゆ。葛卷昌興自記に、元祿三年九月十六日今朝於御城會、千宗室仍利休門弟之内、殊美名之七人之事相尋候處、此事近代人々稱美所也。凡そ當時は大小となく皆以て門弟たる之由。先づ近代稱する七人は、故肥前様浦生飛驒守殿・金森法印・吉田織部・高山南坊・芝山監物・勢多掃部、此の通之由也。又同月廿日の條に、昨日御棚之下板床に塵取・羽ばうき置合様

之事依被仰付、千宗室に相談、とかく別々に置合様子あるべき品に無之、且又ちとりと申候間下の方可然、置様は只つい置きたるが可然、左候はゞ(略)如此たるべき歟、右羽之間、壁のかたへ羽のかうをなして置候事、織部流此の分之由申候。右之由申上候處、左之方へは外の品被爲置よし御意に候。重而右之方へ此の通にて置替也。利休は左右の羽にかまひなく、いづれとも置候旨申候。ちりとりは桐にて黒ぬり、羽は鷹の羽を竹のかはにて包みたるなりと。右のやうの事どもを載せれば、綱紀卿の時茶湯會席の都合等尋ねさせ給ふ事、毎度ありし事知られけり。

○小瀬復庵舊邸

元祿六年の土帳に、小瀬又四郎味噌藏町藤田卜庵隣とあり。延寶の金澤圖を見るに、味噌藏町丹羽織部の後、地にて、材木町へ出づる橋爪に、小瀬順理と記載す。

○小瀬復庵良正傳

燕臺風雅に云ふ。小瀬良正字順元。通名以字行。復更復庵。號桃溪。良正四世祖阪井就安。我儒官小瀬甫庵嫡男也。菅阪井下總養爲子。故冒姓阪井。事詳白石紳書。就安慶長甲寅

以醫仕我微妙公。領二百石。良正及晚年復本姓小瀬也。

良正長刀主術。有深痼而諸醫理亡劑不起者。良正一撮無不驗焉。時與南保恒德齊名。以故公屢益俸。至四百三十石。又工詩。絢爛之美如霞錦照灼。及其溢體頭眩心魂者。還牽壓俗格也。白石先生與書於鳩巢。累嘉良正才思富蔚云々と。按ずるに、良正が秀逸の句多き中にも、殊に名高きは海鼠腸詩なり。

天厨臘月進鵝黃。一尺鸞刀欲截長。癩瘡非關供面藥。龍涎應似賞神香。銀壺凍合醺醺色。玉碗凝成琥珀光。海外由來多美味。肯論公子獨無腸。

又歌學にも志厚く、詠歌世人傳吟するもの少からず。參議中將綱紀卿上洛し給ふ頃、京都の旅館にて月見の御遊ありけるに、良正も伺公しける。からすみにて御酒を賜はり、からすみを題にて詠歌仕れと命ありけるに、取りもあへず。

九重のうちとおもへば所から

すみわたりたる秋の夜の月

また二條左大臣吉忠公、良正が詩を賞美し給うて、詠歌を

賜ひけり。其の歌。

名に高き高麗もろこしの國までも

つたへて仰ぐ言の葉の色

此は良正が朝鮮人來朝、彼の學士と唱和の時賜へりとぞ。

又良正五十歳初度の誕辰を賀し給ひ賜へる歌。

三千とせになるてふ桃の溪かけに

老いず死なすの藥もぞある

良正此の祝歌の語に據つて桃溪の號を稱すとも、又桃溪の號に據つて詠吟なし給へるともいへり。さて享保八年二月武州江戸に在府しけるに、頓に病痾にかゝり、府を發出して金澤へ歸らんと、北陸道の逆路に赴きけるに、越後國名立の驛舎にて歿す。享年五十歳。

終焉作

事親年更短。報主日非長。半百人如夢。落花芳草傍。

發句

ひらけても心の花も名残かな

○大鋸屋町

味噌藏町より淺野川橋場町掛作へ出づる口也。此の町名